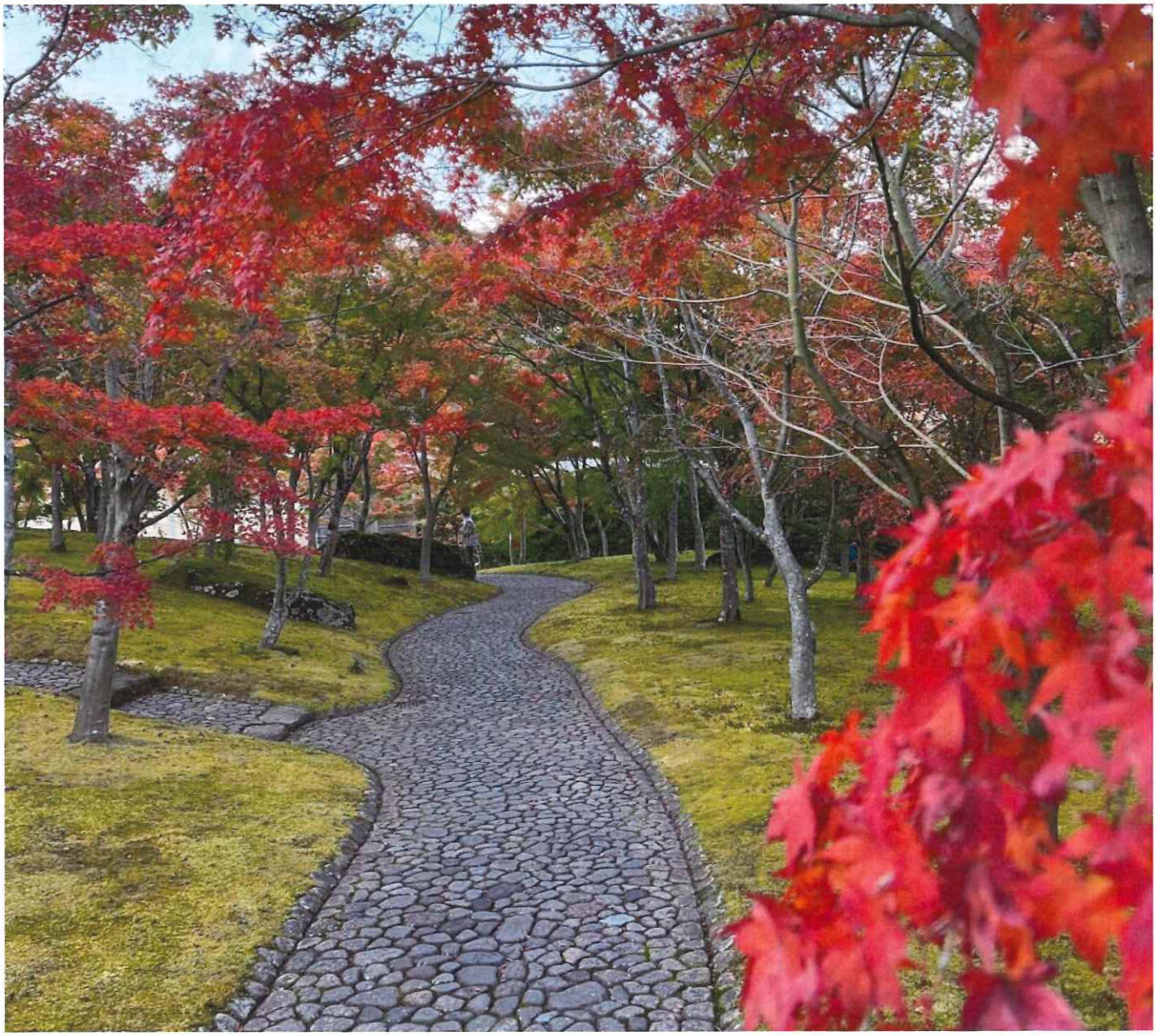
道

m i c h i



11

2023　No. 66

世界救世教　明主様と聖地に直結する会

自然栽培の勝利（土の偉力）
自然農法の原理

そもそも自然農法の原理とは、土の偉力を発揮させることである。（中略）人肥金肥は一切用いず、堆肥のみの栽培であるから、その名のごとく自然農耕法というのである。勿論堆肥の原料である枯葉も枯草も、自然にできるものであるからであって、これに引き換え金肥人肥はもとより、馬糞も鶏糞も、魚粕も木灰等々天から降ったものでも、地から湧いたものでもなく、人間が運んだものである以上、反自然であることはいうまでもない。

そもそも、森羅万象、いかなるものといえども、大自然の恩恵に浴さぬものはない。すなわち火水土の三原素によって生成化育するのである。三原素とは科学的にいえば、火の酸素、水の水素、土の窒素であって、いかなる農作物といえども、この三原素に外れるものはない。神はこのようにして、人間の生命の糧である五穀野菜を過不足なく生産されるよう造ったのであるから、この道理を考えてみればよく分かる。神は人間を生まれさせておきながら、その生命を繋ぐだけの食糧を与えないはずはない。もしその国が有する人口だけの食糧が穫れないとしたら、それは神が造ったところの、自然の法則にどこか叶わないところがあるからである。としたらこれに気づかない限り、食糧問題の解決など思いもよらないのである。

以上のような大自然の法則を無視した人間は、人為的肥料を唯一のものとして今日に至ったのであるから、食糧不足に悩むのはむしろ当然というべきである。まったく自然の理法に無知であったための応報ともいうべきであろう。しかもそれに唯物科学という学理が拍車をかけたので、ついに今日のごとき食糧難時代を来したのである。この意味からいえば、現在の農耕法は進歩どころではなく、事実は退歩したといってもよかろう。したがって自然尊重の農耕法こそ真理である以上、いかに不作でも一人一年一石として、わが国の人口八千三百万とすれば、八千三百万石は必ず生産されるべきである。これは大地を叩く槌は外れても、この理は外れるわけはないのである。

私が唱える自然農法とは、右の理が根本であって、現在日本の食糧不足による農民の疲弊困憊なども、実行次第で難なく解決できるのである。この誤りを見そなわれ給う神としては、捨ておけぬという仁慈大愛の御心が私を通じて自然農法の原理を普く天下に知らしめ給うのであるから、一刻も早くこれに眼を醒まし、本農法を採用すべきであって、かくして農民諸君はまったく救われるのである。

さきに述べたごとく、火水土の三原素が農作物を生育させる原動力としたら、日当たりをよくし、水を充分供給し、浄土に栽培するとすれば、いままでにない大きな成果を挙げ得ることは確かである。いつの日かは知らないが、人間はとんでもない間違いをしでかしてしまった。それが肥料の使用である。まったく土というものの本質を知らなかったのである。　（「栄光」79号　昭和25年11月22日）

花唐草七曜卍花クルス文螺鈿箱　桃山時代（16世紀）

重要文化財　ＭＯＡ美術館所蔵

合口（あいくち）造り長方形の、足のついた黒漆塗りの箱である。文様は貝殻片を切り抜いて施した螺鈿で表されており、真珠光が漆黒に映えて美しい。工作技術が見事であり、漆塗りの調子も丁寧で、わが国の作とみて間違いない。しかし、蓋表中央に数花を相称形に配置した花唐草文様は、李朝の螺鈿に見られる様式であり、葉と蔓の曲線表現には南蛮風も加わっている。花クルス文は、おそらく切支丹の影響だろう。足付きの器形には、中国趣味が窺われる。この作品に以上のような異種の工芸様式が混在して見られるが、それは、大陸の文物や南蛮・切支丹の影響が強くおよんだ桃山時代の製作になるものゆえであろう。

（ＭＯＡ美術館・箱根美術館　名作美術品カレンダーより）

《目　次》

代表挨拶 …… 4
神戸須磨集会所開所一周年 …… 10
感謝奉告① …… 11
感謝奉告② …… 12
一一月度聖地行事　箱根 …… 14
熱海 …… 15
感謝奉告③ …… 16
感謝奉告④ …… 17
聖地ＮＯＷ …… 19
聖地宿泊研修会 …… 20
シリーズ明主様(9) …… 22
新連載『21世紀を生きる』(14) …… 24
シリーズ《幸せの種まき》(5) …… 26

表紙の写真　神仙郷の紅葉

令和５年　課題

われよしの　心浄（きよ）めて　ひとよかれと
祈る心は　神に通へる

～明主様の示された「道」を求め、まっすぐ歩む～

代表挨拶

西村　正資

誰（た）が言（い）ひし　秋（あき）は寂（さび）しきものなりと
されど陽（ひ）に映（は）ゆ紅葉（もみじ）知らずや

（昭和二八年一〇月二五日　明主様詠）

箱根神仙郷のお庭、そしてＭＯＡ美術館お茶室周辺を散策致しますと、大自然の熟した色づきに包まれ、さながら天国に導かれた夢心地に、思わず「明主様ありがとうございます」と、口にせずにはおれなくなります。

来月初旬頃までが、見頃だと思います。皆様も、是非お出かけになられてはいかがでしょうか。

一一月一日、箱根神仙郷では『豊饒感謝の日』、熱海瑞雲郷では『月次祭』が、厳粛に執り行われました。

御神殿には、瑞々しい農産物が捧げられていました。

毎年、秋の収穫を拝見すると、私は嬉しくなります。〝これで一年、また生きることを許された〟と、思うのです。戦後の困難な食料事情の中、両親がその確保に四苦八苦していたのを覚えているからでしょうか。

また、日本の農業が先細りしている中でも、明主様のみ教え『自然農法』の実践を、自分の使命と決意されて、厳しい環境の中を黙々と実施されている信徒のお姿や作物を拝見させていただくと、どのような宝にも勝る有難さを感じます。自分が病に伏し、食欲がなくなった時、いただいた自然農法産お米で炊いたお粥の美味しさは、今でも忘れることができません。

自然農法に人生を懸けていらっしゃいました一人の先達を思い出します。

入信された当時、明主様の御面会に臨み、その場で自然農法にかけられるお言葉に触れて感動し〝稲作農家であった自分は、この自然農法でお役に立たせてい

ただこう〃と決意して、故郷石川に帰られました。

その後数年、全ての耕地を自然農法に切り替え、取り組まれましたが、「害虫は発生するし、除草をはじめすべて手作業で労力的に大変な上、秋の収穫は、一気に半減、周囲からは笑われて馬鹿にされ、限界を感じ、辞めようと思った」そうです。でも〃明主様にお断りしてから辞めよう〃と、御面会に出掛けたのです。大勢の参拝者ですから、直接にお断りなどできないと分かってはいましたが、心のケジメとして、そのように祈っていたそうです。暫くして明主様がご出座され、一言お言葉を出され、少し間があって、突然『**自然農法は大変と思うが、神様のご用で大切なことだから、とにかく頑張って欲しい**』という主旨のお言葉を発せられたそうです。

先達は「〃自分の心を見透かされていた〃と、ただただ〃申し訳なかった〃という思いで、ひれ伏した」ということです。「その時、なぜそのような話をされたのか。その後どのようなお話をされたのか。衝撃で全く覚えていない」「この時のお言葉で、改めて自然農法を続ける決心をし、今日まで来させていただいている。あの時辞めなくて良かったと、今つくづく思う。明主様を怖く感じた。心の内まで、筒抜けだったんだよ」と、語られていました。

明主様の並々ならぬご決意を、私はいかほど理解していたかと、畏れの思いを感じながら、先達の言葉を聞きました。

自然農法は、明主様を通し、神様が示された正しい農法です。その普及は、明主様の人類救済に欠くことの出来ない三本柱の一つです。

『神は人間を生まれさせておきながら、その生命を繋ぐだけの食糧を与えないはずはない』

（「自然農法の原理」栄光79号昭和25年11月22日）

み教えの如く、世界の食料、飢餓問題の解決法です。また、化学農法の作物を多く食していては、体内に残留した異物・薬物が、健康体への育みを阻害するにとどまらず、知らず知らずのうちに不快感が起こり、周囲に争いを生み出すこととなり、その結果、霊的にはくもりが増量して、天国人への道が厳しくなると訴えられました。

現在、多くの方々の努力により、日本の農政は、有機農業に大きく舵を切り、学校給食も有機へと切り替わりつつあります。有機農産物が品薄となり、価格高騰し、次第に入手が難しくなってきています。社会がようやく明主様の世界に入って来ました。

尊崇と感謝の思いで、先達のお顔を思い出しました。

つづいて、今号も『道』一〇月号に掲載された感謝奉告に、学ばせていただきます。

『道』一〇月号、感謝奉告に学ぶ

熱海グループのＫＨさんのご奉告です。

九月初め、息子さんの右足が腫れ、痛みも出てきて、整形外科を受診されました。結果的には一度の電気治療を受けられただけのようですが、その後ますます悪化しました。

ＫＨさんは〝ご浄霊をお取り次ぎするしかない〟との気持ちが強くなり、その旨を本人に伝えたところ「お願いします」と素直に受けられたのです。その時〝絶対治す。治るまで取り次ぐ〟と、強い決意で臨まれたそうです。一時間の後に「なんとなく良いかな」と本人。それから毎日の取り次ぎが楽しみになり、数日で随分腫れが引き、再び同整形外科に行ったところ、医師から「膝の水は無くなってきている。随分腫れも引いた。不思議に良くなっています」と。その後も毎日お取り次ぎを続け、短期間のうちに腫れや痛み、むくみも取れ、熟睡できるまで回復したという感謝の奉告です。

〝明主様は、私にもお働き下さる〟〝貴重な体験〟と語られていますが、信仰に新鮮な喜びを強く感じました。

ＫＨさんから学ぶことは、信仰を伝えるべき時には、躊躇せず伝え、浄霊を取り次ぐ時には〝治るまで取り次ぐ〟という腹構えを感じます。背後で先祖様も大きな期待をされ、後押し下さるのでしょうね。良くなって終わりでなく、これを機会に是非毎日ご浄霊をお取り次ぎ下さい。また、息子さんからご浄霊をいただくことも大切で、その都度喜びを伝えてみてはいかがでしょうか。

おそらく、浄化前より浄化後の方が、一歩も二歩も家庭天国に前進しているものと思います。

私たちは、目の色変えて信仰させていただくことは必要ありません。明主様は、私たちが求めれば、いつでもどこでも、どなたにも必ずお働き下さいます。ですから安心して、楽しみながら、感謝しながら、笑顔で家庭天国を造らせていただきましょう。

大阪グループのＮＭさん、そしてＫＭさんのご奉告です。

奇遇にも、お二方のご奉告の内容が重なりました。ほとんど同じような信仰の営みが、同時進行のように行われ驚きました。明主様に、どのようなご意図があったのでしょうか。その内容を学んでみたいと思います。

ＮＭさんの奉告は、昨年三月に当機関誌に掲載された友人の子息ＮＴさんのその後のことです。

父親の信仰に倣い、日々「感謝箱」の取り組みをされてきたＮＴさんでしたが、今度は、その子息がまた

父親の姿に倣い、随分以前から感謝の生活を大切にするため自主的に「感謝箱」の取り組みをされていたということです。「高校に進学するのを機に、今日までの分を献金します」と、ＮＭさんに託されたそうです。その内容はほとんどが一円玉であったようですが、その素直な心に感動したＮＭさんは、心が晴れ晴れとし、喜びと感謝で聖地にお届けさせていただいたということでした。

一方、**ＫＭさん**のご奉告は、三年前娘さんがお孫さんに感謝箱を渡し、「中学に入学して、いろんな友達に出会うから、感謝の習慣が身につくように」と伝えました。その後、家の中でも生活に変化があったようです。今年九月、ＫＭさんが娘さん宅を訪れたところ、お孫さんが中学三年間ずっと感謝箱を続けていたそうです。それを「お届けして下さい」と箱の中身を渡され「見るとほとんどが一円玉のように見えた」とのことでした。「そこに込められた孫娘の想いは、何にも勝る宝のように感じられ、母親も嬉しそうにしていた」と、奉告されています。孫娘さんは「高校に入学してからも続ける」と、実行されているようで、「伝えて良かった。しっかり伝えることが如何に大切か、勉強になった」と、喜こんでいらっしゃいました。

実施されたお子様方は、実践を通して確かな何かを感じられたのでしょう。そうでなければ貴重なお小遣い、たとえ一円でも惜しくなります。人生観を学び整える大切な成長の時に、「感謝」という人間にしか許されていない徳質を学び高めることは、素晴らしいことだと思います。我が子を信用し「この子は判っている」と、大人が何も働きかけをせず、後に期待とは違う結果となった事例を沢山見てきました。

信仰を子供に伝える時、叱るように「罰が当たるよ」と言うことや「こうしなさい、あゝしなさい」等と、直接的に指示することも結構ですが、親が実行する姿を見せ、その喜びを語り、この度の感謝箱のようにやらせてみて一緒に喜び合うことも一つでしょう。信仰は、理屈から入るより、実体験から伝えることの方がとても分かり易いと思います。

今後の取り組み継続を通して、お孫さん方が、更に体験から確信へと人生の質を高められることを祈っております。

古賀集会所のＨＡさんのご奉告です。

Ｈさんは、若く信仰歴もそれほど長くありませんが、人並み以上の波乱万丈の人生を経験され、一つ一つ克服される過程で、明主様への信仰を絶対のものと高めてこられました。そして、この度〝明主様のお役に立ちたい、自分と同じような境遇を抱える人のお役に立ちたい〟と、助師資格審査研修会に臨まれました。

参加する中、感じ取られたのは〝お役に立たせていただきたいという願望ではなく、同じ境遇にある方々を救うという「使命」が自分にあるのだ〟という、とても崇高な境地に至っていらっしゃいます。

その通りでしょう。明主様は、Hさんだけをお救いになりたいのではなく、同じ苦しみを味わうすべての方々の救済を目指されているのは当然のことだと思います。しかし、順序もあり〝まずこの人を救えば、次のこの人を救うだろう〟との、明主様のご期待と計算があるのではないでしょうか。それは、やってもやらなくても良いということではなく、Hさんが次に救いを伝える方は、おそらく決まっているのでしょう。先に救われたということは〝きっと期待に応えてくれる〟と、明主様から信用を得ているということですね。

素晴らしい気づきと覚悟をされました。共々に、救いの道筋を断ち切らないよう、頑張りましょうね。

鳴門グループのOKさんのご奉告です。

Oさんのお宅を、鳴門グループの拠点としてご神業にお使いいただいているということです。近隣の多くの信徒も大変喜ばれているようで、良かったですね。

阪神淡路大震災の時に被災されて、建て替えの時に〝将来この家を、明主様のご用に使って欲しい〟と願って、設計されたそうです。震災から二七年が経ち、今その祈り、夢が突然叶えられたことに驚きます。そのように思いますと、この度の教団浄化も、神定めであり明主様の深いご経綸の内ということでしょうか。

また何ごとも、「想念次第」とみ教えいただいています通り、その証でもありますね。想念と祈り、その大切さは全ての源流であるとも感じます。「み教え拝読」の尊さを思います。

また、日本農業の衰退と共に、家業の種苗店のことで、長い間経営に苦しまれてきたようです。そのような中、「令和四年四月『みどりの食料システム法』が制定され、農林水産省の推進事業として、世界救世教の自然農法が推奨されていること」を知らされ、前向きに気持ちを切り替え、政治家や野菜バイヤーに声を掛け始めています。九月には、県議会議員に自然農法の提案ができ、「良い提案をいただいた」と評価を受け、徳島県を全国に先駆けた自然農法普及先進県としていきたいと、夢を語っていらっしゃいます。

また、自然農法クラブというラインングループを設け、日々の情報交換や、普及運動も始められています。

気づくとは〝そのことをしなさい〟という明主様のお声かもしれません。そして、行動する中で、人との出会いや環境が整ってきていますね。これはますますの後押しなのでしょう。対外活動は、救世信仰の要の一つです。

大切な、ご神業を担っていらっしゃると信じます。
また、過去を振り返り「これまで様々な浄化にご守護をいただき、それで満足していましたが、今は、その先があるのだと思えるようになった」そうです。この四ヶ月で大きく人生の構えが変わりつつありますね。
夢は大きく掲げ、祈りは崇高な〝皆のため〟に。そして実践は、足元から無理をせず、周囲に助言を求め、自我を慎んで丁寧に進める。そうであれば明主様は、きっとお働き下さることでしょう。
ご活躍をお祈りしております。

当会相談役　則武克明先生、ご帰幽の奉告

聖地直結の会前代表則武克明先生が、一〇月二八日午前六時四三分に肺炎のため、帰幽されました。八三歳でした。
先生には「明主様と聖地に直結する会」発会から令和三年まで、会の基礎づくり、動乱の中、初代代表として毅然と「明主様中心の信仰」をお示しいただき、動揺する信徒を力強く牽引いただきました。
発会から五年半、気力衰えることなく、この八月まで第一線で活躍されました。九月初め、入院に際しても「二〇日頃には退院して、その後四国に行きたい」と、最後まで、明主様のご神業に従われました。
当機関誌巻末に掲載している「幸せの種まき―イソップ物語」は、先生最後の原稿となりました。ご浄化の中、信徒家庭の信仰継承が難しくなったことを憂い、「子や孫にいきなり信仰では通りが悪いだろうから、会話の導入口として優しい物語を。これは人を騙したり、殺したりしないんだよ。み教えに通じる」と、書き溜められ、二〇話分の原稿をお預かりしました。今後も掲載を継続し、しばらくは、私たちと共にご神業をお続けいただきます。
先生の御遺徳をお忍びすると共に、私たちも人生の詰を大切に、最後の瞬間まで明主様を真っすぐに見つめ、歩ませていただきたいと思います。
明主様のみ許に旅立たれた先生には、今後とも、霊界からのお働きとお導きを、心からお祈り致します。
ここに謹んで哀悼の意を表し、皆様にご報告を申し上げます。

今年もあと僅かとなりました。来月二三日には、今年のゴール地点、『明主様御生誕祭』を迎えます。
祭典終了後に、今年も「全国信徒集会」を開催します。故則武克明先生をお忍びする、祈りの時も設けたいと願っております。
また聖地で皆様にお会いできることを、楽しみにしております。

神戸須磨集会所開所一周年

更なるご神業進展を誓う一周年祭に

感謝の祈りを捧げる参拝者

開所一周年を寿ぐ祝詞奏上

感謝と喜びが広がった感謝奉告

アッという間の一年を振り返る参拝者

残暑も和らぎ、すすきの穂が揺れる候となった一〇月二二日(日)、二三日(月)、神戸須磨集会所において開所一周年祭が執り行われました。

門埜責任役員の先達のもと式典(開所一周年祭祝詞奏上、天津祝詞・善言讃詞奏上、御歌奉唱、み教え、ご浄霊)を終え、開所一周年のご挨拶、信徒から感謝奉告(一日目は神戸のNYさん、二日目は淡路のMHさん)、西村代表からのお話があり、終始、和気あいあいとした雰囲気の中、信徒の喜び溢れる祝賀の行事となり、両日合わせて六四名が参拝されました。

代表からは、み教え「世界救世教とは何か」に基づいてお話を頂きました。「普段から聞きなれていて、信者なら誰でも知っているというみ教えは、大事だからこそ何度何度も繰り返しいただくのです」「〝このみ教えは知っている〟というだけでは何の力にもなりません」「み教えを実践することが肝要なのです」ということを種々の例を上げてお話いただきました。参列者一同今後のさらなるご神業の進展を目指して、ご用に向かう姿勢を新たにしました。

感謝奉告 ①

み教え拝読に努め、さらに実践へ

神戸須磨集会所　ＮＹ

神戸須磨集会所、開所一周年おめでとうございます。二つ、神様より教えられたことをご奉告させていただきます。

令和四年八月末、東方之光神戸センター参拝の時に門埜先生から、新大阪の教会用物件が不調に終わったと聞きました。その日の午後、武田伸之先生から「板宿(神戸市)に物件があるので来てください。」とのことで行きますと、鉄骨ビルの三階部分で、内部はスケルトンの状態で、このままでは御神体御奉斎は無理な様子でした。

そこでたまたま須磨の家をリフォーム中でしたので、先生に一度見に来て下さいと提案したところ、早速来ていただきました。後日、西村代表、武田先生、門埜先生方が来ていただき、相談の上、ここが良いと決まりました。思えば五年前、知り合いの業者からこの建物を勧められ、深い考えもなく購入したお蔭で、今こうしてこの地域の神館(かみやかた)としてお役に立ったのは、神様が前もってご用意されたのだと思います。

現在起きていることは、未来に必要だから起きているのであると、神様に教えられました。

もう一つは、み教えについてです。信仰二世の私は、〝み教えは知っている〟と思っていましたが、それは私の思い込みでした。私が四五歳の時に、前の嫁がスキルス胃がんで余命半年と宣告されました。その時は、やり切れない思いにもだえ苦しみました。

今思いますと、事故や地震等で一瞬にして家族を亡くした人達は、お別れを言う時間もなかったのだということに思い当たりました。ただ、その半年は私にとってこの上もなく苦しい半年でした。因みに、私はその時75kgだったのが、58kgまで減りました。でもその半年間、思い苦しんだお蔭で、今は思い残すことはありません。み教えの中に苦悩や煩悶をとるには、感謝することだと示されています。み教えの中には、人は幸福になるために、必要なことは全て準備されているのだと書かれています。これからは、もっとみ教えを、拝読させていただこうと思います。そして生活の中にみ教え拝読を取り入れ、少しでも実践に移していきたいと思っています。

聖地直結の会に入会し、集会所ができたお蔭で、気兼ねなく、いつでも自由に参拝ができる喜びを感じた

一年でした。また、救世会館で秋季大祭に参拝が許されたことは、大きな喜びでした。武田伸之先生に聖地直結の会にお導きいただいたことを心から感謝しています。

ありがとうございました。これで私の発表を終わらせていただきます。皆様ありがとうございました。

感謝奉告 ②

ご浄霊をいただく幸わせ、取次ぐ喜び

淡路グループ　ＭＨ

今年いただいたご守護を発表させていただきます。

私は三八歳の時突然右足が痛くなり、寒い時期でもあったので〝神経痛になったのかな〟と軽く思っていたのです。近くの医者で診てもらうと「整形外科へ行きなさい」と言われました。そこで整形外科へ行ったのですが、名前を呼ばれても、痛くて歩くのがやっとという程に痛みが強まってしまいました。その時判明したのが変形性股関節症という病名でした。リハビリを勧められたのですが、お店(一昨年までお好み焼をやっていました)を始めて五年程たった頃で、とても忙しいのと子供達も小さかったこともあり、リハビリは一切できませんでした。家業以外にできたことは、聖地参拝、春秋の大祭と布教所参拝、そして浄霊がすべてでした。

やがてそのうちに徐々に痛みもなくなってきましたが、足の長さが、左右少しずつ違ってきました。それでも手術はしようとは一度も思いませんでした。

ところが、今年三月一一日の昼食後、急に足に激痛が走りました。トイレには一度だけ這って行きました。あとは壁、タンス等を伝って部屋を移動しました。ひどい時には、一日中食事も取れませんでした。三日後、近くに住んでいるＵさんに、毎日毎日浄霊に来ていただきました。でも心の中は不安で一杯でした。〝いつになったら元の状態に戻れるんだろう〟と気持もすごく焦ってきて、手術のことばかりが頭をよぎっていました。友達が、神戸の安心クリニックのパンフレットを持ってきてくれました。そうこうしている内に、完全に痛みもなくなり元に戻ったのは六月の初めだったと思います。これから寒くなってきますと、痛みも出てくるかと思うので、気をつけて過ごしたいと思っています。

次に、今ご浄霊のお取次をさせていただいている方のお話をさせていただきます。五月頃、Ａさんから久

し振りに電話がかかってきたかと思ったら、「一二月頃から左の腕が痛くて上がらない」とのことで、「あちらこちらの整骨院へ行っているが、全然治らず毎日痛い痛いと言っている」ということでした。電話の声からも〝痛い〟というのが、すごく伝わってきました。それからは、月に何回か家に来て、ご浄霊をお取り次ぎさせていただいています。整骨院へは大分よくなってきたので、この頃は通っていないようです。お玉串も気持ちよくお供えしていただいています。その方は浄霊を受ける度に体が熱くなると言われます。〝それだけよくわかるんだなあ〟と、こちらも嬉しくなります。完全に良くなったあとも、ご浄霊の継続のお許しがいただければと願っています。

今回は最近のご守護のみの報告になりましたが、長い信仰生活の中では、他にも数々のご守護をいただいてまいりました。ですから、発表出来る機会があれば、その時にまたご奉告させていただきます。

これからの人生、どう進んで行くかわかりませんが、大神様、明主様に心を向けて、利他愛の実践に心がけて、日々過ごしていけたらいいなと思っています。

大神様、明主様、今日も集会所までバス電車を乗り継いで、歩いて来させていただいたことに感謝で一杯です。本当にありがとうございました。

俵に一年（ひととせ）の感謝を込めて「豊饒感謝の日」

神前に捧げられた収穫の恵

ご神前に高く積まれた米俵を仰ぎ、豊饒感謝の善言讃詞が轟く

豊饒感謝のみまつりは、農作物の収穫のみならず、この一年の、あらゆる分野における成果、結果を奉告する機会と位置付けられた。とくに本年を顧て、今まで以上に人の幸せを願って行動する人づくりが、確実に進展していることが奉告された。

一人一人が明主様に真向かう「月次祭」

困難な時代にあって、明主様に見守られている事への感謝が捧げられた

祭典の最後に捧げられたご讃歌の合唱

風・水・火、飢・病・戦で苦しむ困難な時代の中で、神様の光と愛に包まれて、日々前向きな心を許されていることに感謝を捧げた。そして、一日も早く明主様の救いに与る人が増えていくように、さらなる御用奉仕への参画を誓った。

感謝奉告 ③

我が家の転機になった平安郷参拝

鳴門グループ　ＯＫ

一〇月七日の聖地平安郷参拝での気付と学びをご奉告させていただきます。

京都平安郷への参拝は、約一〇年振りの参拝でした。土の聖地である平安郷の参拝は私にとって、大変意味のある参拝と思い楽しみにしておりました。家族皆での参拝と思っておりましたが、仕事の都合もあり、叔母との参拝が許されました。

叔母は、私の父の妹であり、ここ数年体調を崩しておりました。そんな叔母の気持も含めて、今回の参拝は叔母も大変喜んでおりました。聖地参拝の数日前より、叔母は、Ｏ家で宿泊し、前日には、聖地参拝での思いを私たち家族に打ち明けてくれました。そんな中、口癖のように叔母は、「おまえは、実父が亡くなる四日前に生まれた子供やから、どんなに不憫だったことか」と、同じことを繰り返し言っておりました。〝あっ、またいつもの事を言っているなあ〟と、半ば諦めに似た境地になっていましたが、この時ばかりは、〝ん？ん？この事に何か意味があるのでは？〟と、母と私は思わされていました。もしかしたら、亡くなった実父は何か思いがあり、叔母を使って私たちに思いを伝えようとしているのではないかと思いました。なぜか、焦り、憤りにも似たような気持を感じとりました。これは、大変なとまどいの中で、実父は亡くなっていったのだと、その実父の思いを誰かが汲み取ってあげて、誰かがわかってあげないといけないと思いました。大変なことに気付かされました。叔母が生まれて、七四年。初めて、実父のこの思いを神様にご奉告させていただきました。七四年目にして、初めて浮かばれたのではないかと、大変大変ありがたい気持と感謝が湧いてまいりました。

私は、Ｏ家の根底にある、様々な思い、奥のまた奥にある何かがこの時、綺麗になったと思わされました。私が生まれて約五〇年。究極のご守護ではないかと、それくらいの気持にさせていただきました。

聖地参拝では、高速道路の事故渋滞もあり、祭典にはギリギリ間に合いました。和田先生のご配慮で、瑞雲の堀口社長にもお会いでき、自然農法、自然食の新たな出発を感じとることができました。一〇年振りに見る平安郷は、本当に綺麗で、心が洗われました。明主様の「聖地の土を踏むだけで良い」とおっしゃられ

た意味を改めて痛感させられました。
今、世の中から、明主様のお示しになられた、救いの三本柱である浄霊、自然農法、芸術が求められています。なぜこのタイミングで救いの三本柱の全てが脚光を浴びているのかを考える時、これこそが、明主様のみ心の現われだとしか思えません。私は、今こそ明主様の許に馳せ参じ、救いの三本柱のご用のお手伝いに邁進させていただきたいと思います。先ずは、この事実をまだ知らない方々に述べ伝えたいと思います。
明主様ありがとうございました。

感謝奉告 ④

信仰人生の転換をいただいた出会い

名古屋栄グループ　ＫＨ

私は以前、世界メシア教（二〇二二年四月三〇日付で退会）で地域長のお役をいただいていました。
毎月一回の月参拝は勿論のこと、企画会、地域長会、神前花のご奉仕、お言葉勉強会、集会等熱心に参加していました。しかし、お言葉を学べば学ぶ程、私の心の奥底には明主様信仰の学びとかけ離れていくようでした。お言葉を、受け入れられない私がいました。心に違和感や不安を感じながら、日々地域長としての任務を担っていました。
そんな中、昨年一二月、私のグループのＩさんがメシア教を退会され「明主様と聖地に直結する会」に移られました。Ｉさんは、それまでの信仰には常々疑問を持っておられ、「これからの人生は原点である明主様信仰を学んで歩んでいきたい」と強く思われてのことだと思いました。Ｉさんから、退会される四ヶ月程前に電話があり、聖地直結の会の太田先生、大島先生と一度お会いして一緒にお話を聞いて欲しいと言われました。昨年八月二九日に、名古屋の喫茶店でお会いして色々とお話を聞かせていただきました。その後も月一回、話し合う機会を作ってくださいました。私は〝何を信じて今後の人生をどう生きていったら良いのか〜？〟と自分を見つめ直す良い機会を与えていただいたことに今では感謝しています。
今年五月一一日、五年ぶりに、四国でご用されておられると思っていた和田先生から突然お電話がありました。以前に、我が家の集会に来ていただいたこともあったので、とても懐かしく嬉しく思いました。
このたび「明主様と聖地に直結する会」に移られたと

聞き、驚きと共に、〝なぜ〜？どうして〜？何があったの〜？〟との思いが脳裏を駆けめぐりました。その後、五月一七日に先生とお会いしてお話を聞かせていただき、迷いもなく私も移る事を決意しました。

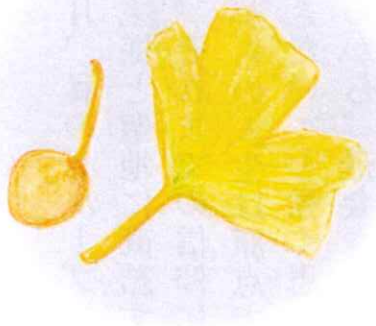
この一連の事は、まさに明主様がお働きになって、私の進むべき道に導いて下さったと強く感じさせていただきました。不思議にもタイミングよく、先生が名古屋に戻ってこられ、新たに「明主様と聖地に直結する会　名古屋栄グループ」が五月一七日、私の入会と同じ日に発足が許されました。拠点も早い段階で決まり、いづのめ教団が、五年程使用していなかった鶴舞浄霊センターの一室を貸して下さることになりました。八月二八日には、施設の使用方法の確認と清掃をさせていただきました。九月から毎週水曜日一〇時〜一六時まで参拝、浄霊、清掃奉仕、座談会を行っています。現在、名古屋栄グループには三〇世帯の信者さんが入会されています。

自然食品の注文購入もできるようになり、信者さんも徐々に増え、楽しく過ごさせていただいています。

拠点ができた一ヶ月後の一〇月七日には、久しぶりに土の聖地京都平安郷の秋季大祭にも参拝が許されました。当日はお天気にも恵まれ、時折響く虫の音や閑静な竹林、季節を彩る山野草等、秋の気配を感じながら心穏やかに、楽しい時間を皆さんと共に過ごさせていただきました。岡田茂吉記念館にも見学させていただき、明主様を身近に感じられました事、心から感謝致しました。

これからは魂の進歩向上を念頭において、明主様が望んでいらっしゃる救いの三本柱、浄霊（神様の愛）・自然農法（自然食）・芸術（心と体と魂を清めて頂く）を意識して、心新たに明主様に倣って、明主様のみ手足となって、明るく楽しく心裕かにご用にお仕えさせていただきたいと思っています。

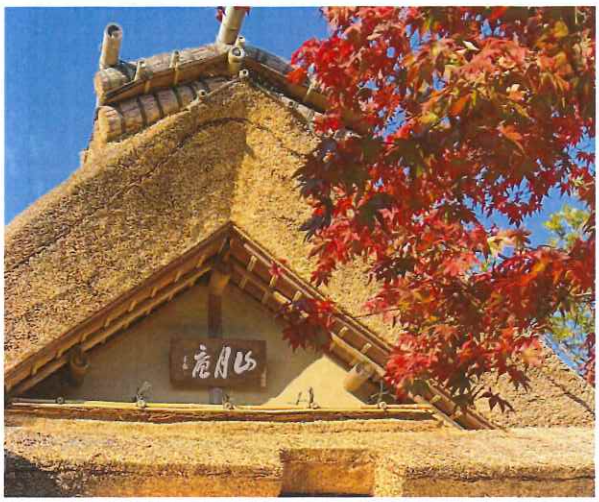
ありがとうございました。



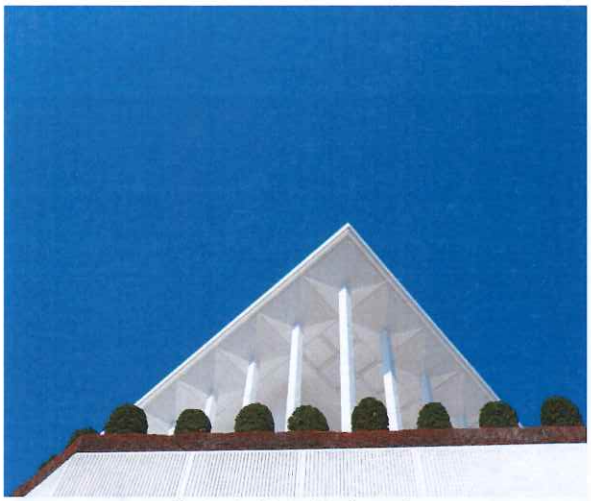
聖地NOW

彩色鮮やかに染まる

箱根美術館と観山亭の秋

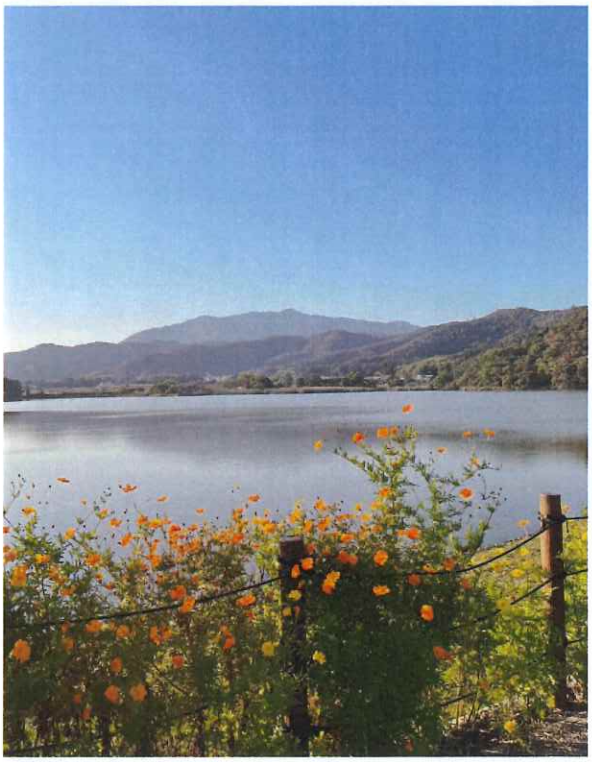


茅の香り立ちそうな山月庵

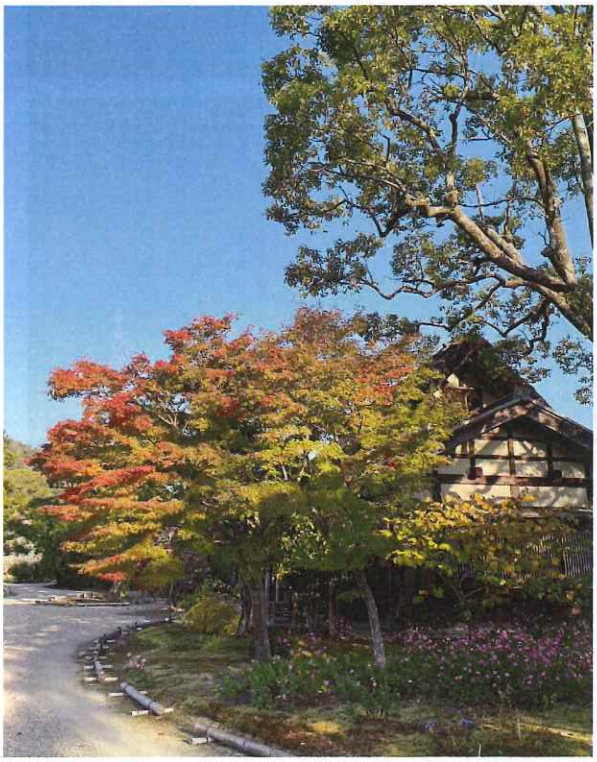


救世会館と紺碧の空

箱根美術館入口から苔庭へ



広沢池とコスモス



楠風荘の秋景色

第三回聖地宿泊奉仕研修会

天高く〝信仰〟肥ゆる秋

今月三、四日、聖地瑞雲郷で、第三回聖地宿泊奉仕研修会を実施。両日無風、十一月というのに暖かく、さらに突き抜けるような青空の下で、ご奉仕をさせていただきました。二時間の境内清掃を通して、聖地ご造営に心血を注がれた明主様に思いを馳せ、夕食後の全体集会では、瑞雲郷、聖蹟・東山荘(現在、国の登録有形文化財)について学びました。二日目は、起床後、直ちに境内に出て、約一時間三〇分境内清掃。朝拝後、タクシーで東山荘に移動し、瑞雲郷建設の基点となった東山荘で、明主様の御事蹟に肉迫しました。「御心に触れることができた」、「日々この小径を歩かれたのだな」、「聞いていた明主様の話は、ここでの出来事だったんだ」……。まさに、明主様にご面会を許された奉仕研修会となりました。

入所参拝に臨む参加者

夜明けと共に一斉に境内清掃へ

掃き清められた三叉路に続く道

水晶殿下の萩の落ち葉も一掃

石雲台につながる階段もスッキリした琳派の流れが現われた

明主様ご在世当時のままに保たれている「光明の間」

熱海でのご神業初期、ご面会に用いられた「光明の間」

聖蹟東山荘で明主様にご面会

東山荘における明主様のご神業について、真剣に聴き入る参加者メンバー

明主様が定められた聖地が霊地であることを宗教学者、建築家の調査研究に基づいて解説。日中のご奉仕の疲れも一蹴された

シリーズ　明主様(9)　〝実業の道〟

岡倉天心をたずねて

岡田商店の開店後間もなく、教祖は装身具の研究、制作に没頭し、あらゆる機会をとらえて研鑽を積んだが、なかでも特筆すべきものは東京美術学校の設立者の一人、岡倉覚三（天心と号した）を訪問したことである。

岡倉天心は、明治期における日本美術界の指導者というだけではなく、『東洋の理想』、『茶の本』など英文の著書もあり、アメリカのボストン美術館の東洋美術部長にも就任し、日本の文化を海外に紹介したことでも広く知られている。

天心は、明治一〇年（一八七七年）、東京大学文学部に入学し、その在学中、たまたま同大学で哲学、経済学を教えていたアメリカ人フェノロサと親交を得た。このフェノロサは美術にも造詣が深く、熱心に日本美術の研究を続けていた。天心がフェノロサの通訳をつとめたこともあって、フェノロサはその堪能な英語の力をかい、自分の研究の助手としたのである。この時の経験が、祖国日本の伝統美術、ことに古美術に対して、天心の眼を大きく開くこととなった。

教祖が天心をたずね、五浦へ旅をしたのは、その後間もないころであったと思われる。これについて、教祖は昭和二四年（一九四九年）につぎのように記している。

「私は三〇余年前岡倉天心先生が大観、春草、観山、武山の四画伯を従え、常陸の国五浦に隠棲した時であった。その頃私は或事情があって天心先生に面接する事を得た。先生は将来の日本画に対する抱負などを語られ、私も非常に得る処あり、先生の凡ならざる事も其時知ったのである。其日下村観山、木村武山の二画伯と一夜語り明した事があった。其際観山先生の語る処によれば、『美術院を作った天心先生の意図は、光琳を現代に生かすにある。従而、我々は線を使はないのが本意である。今日我々の画を朦朧派などと謂って軽蔑するが、何れは必ず認められる時が来るに違いない。』といふのである。全く先生の言の如く院派の画はまもなく日本画壇を風靡し、日本画の革命となった事は周知の通りである。」

この五浦訪問がいつのことであったのか、はっきりした記録はないが、関係資料を検討すると、明治四〇年（一九〇七年）の三月から一〇月の間と考えられるのである。

そのころ、東京から五浦までは、常磐線で六時間を超える長旅であった。開店間もない卸問屋の主人であった教祖の毎日は目のまわるような忙しさであったろう。そういう

多忙の中を、丸二日かけて行ったわけである。この旅の目的について、教祖は「或事情があって……」と記しているだけなので、詳細は不明である。しかし教祖は、かつて東京美術学校の校長であり、今や新しい芸術運動を主宰する岡倉天心に、何ごとか教えを求めたに違いない。それに応えて、天心は尽きることのない蘊蓄を傾けて教祖に多くの示唆を与えたことであろう。それは、教祖が常日ごろ胸に温めていた装身具などのデザインの制作に関してのことであったかもしれない。これを機にして、広く世界の芸術についてそれからそれへと話題は広がって、心おきなく天心は、新芸術の創造をめぐってみずからの理想とするところを情熱的に語ったことであろう。

すでに触れたように、教祖は初めて持った自分の店を光琳堂と名付けた。そのことからもうかがえるように、当時すでに、教祖の心中には、尾形光琳に対する高い評価、さらには尊敬の念が生じ、彼に私淑して、その足跡にあやかるという思いができあがっていたはずである。教祖は、そうした光琳への熱い思いを、天心の門下生である下村観山、木村武山に繰り返し語ったに違いない。観山は、天心の芸術観が、江戸期に大和芸術の絶頂を示す諸作品を創造した光琳の芸術を、この現代に生かすことにあると、はっきりとらえていた。教祖は、光琳への熱い思いを天心に告げ、意見を仰ぎ、さらにその夜は、光琳について、観山や武山とも話し合ったに違いない。とくに観山は、よく教祖の意図を理解し、その心を励ましたことであろう。

五浦における天心との出会い、観山、武山らとの、親密な語らいによって、教祖は自分の考え方や、これから進む道に、より一層はっきりとした確信をもつことができたに違いない。そういう確信をもって、装身具の制作に打ち込んだ結果として、蒔絵の櫛や簪に琳派のやわらかな優美さを表現することに成功したのであろうし、二年後の博覧会において、みごとに入選し、銅賞を獲得するという栄冠に輝くにいたるのである。さらに後年になって、教祖は琳派の美術品の蒐集に力を尽すとともに、箱根や熱海の聖地造営を直接指図し、その随所に琳派の感覚を盛り込んで、独創的な庭園を完成したのであった。これらのことによってみても、「光琳を現代に生かす」という思想は、生涯を通じて、脈々として生き続けていたことが知られるのである。

光琳は、絵ばかりでなく工芸の分野にも才能を発揮して優れた蒔絵の作品を残しており、その中には櫛なども見られるのである。当時、装身具のデザイン研究に没頭していた教祖が、光琳の芸術に深く魅惑されて、その真髄を吸収することに意を傾け尽したであろうことは想像に難くない。そのような意味において、五浦の一夜は、教祖のその後の歩みに決定的な重みを持つものであった、と言っても決して過言ではない。

…次号に続く『東方之光』（上巻）より

新連載『21世紀を生きる』（14）

「人類の未来を語る」③

高頭　和生

今回も、田坂広志氏の著の最新本『人類の未来を語る』（光文社）を通して、「アートとしての人生」「アートの未来はどこに向かうのか」という項目にスポットをあてます。著書では「アート」と表現していますが、ご存じのように「アート」を直訳すると「芸術」でして、「芸術としての人生」とは、明主様の教えでいう「天国は芸術の世界」を、現代の技術によって広がる近未来の姿として科学者が述べていることが興味深いです。

著者はカール・マルクスと宮沢賢治の言葉を取り上げて話を進めています。「資本論」を著した経済学者のカール・マルクスは、「将来、高度に技術が発達すると、人々は苦役のような労働から解放され、多くの余暇時間が生まれる」と言いました。その未来社会では、「余暇を使って絵画や音楽、詩や小説などの創作活動、すなわち「芸術活動」に携わるようになる」と多くの人は予見されています。また、宮沢賢治は「いつの日か、一億の芸術家、一億の詩人が生まれる時代が来る」と、未来社会を予見しました。そして現代は、先進国中心に「第四次産業革命」が進み、ロボテックスや人口知能（ＡＩ）の技術が普及し、オンラインや仮想現実の技術、ドローンや自動運転の技術などが広がり、多くの人々は単純な肉体労働や、定型的な知識労働から解放され、労働時間は短くなることが予見できます。このような近未来の環境下で、芸術活動は私たちの生活と、どのような関わりを持ち、どのような影響を与え合うのかと投げかけています。

ひとつは「最先端技術の進歩と芸術の進化」です。昨今、ＡＩ技術がビートルズの新曲を創作し、レンブラントの新作を描いたことが話題となりました。最先端の技術を用いることで、ロボットが人間と協同することで新たなスタイルの絵画や彫刻の制作も可能です。アーティストが三次元の仮想空間に絵画を描き、ＶＲゴーグルをつけた人々がそれを鑑賞する芸術が実現しています。これまでの制作者と鑑賞者という二項対立的にとらえられていた芸術の世界が、観客参加型や、製作者と参加者の共同作品も進化してゆきます。コロナ禍で参加型の演奏動画、歌唱動画配信が話題となりました。このようなデジタルやＶＲの技術によって参加者の数だけ「自分の作品」を自由に創ることができ、参加型の芸術は進化していくと書かれています。

そして労働も芸術になるといいます。料理のシェフやパティシエは提供する食べ物を「創造する作品」としてとらえ、来店する客もそれを求めています。行列のできる人気ラーメン店も「自分だけが提供できる個性的な作品」と考え、麺やスープ、具材を徹底的にこだわります。料理の世

界だけでなく、接客サービスや営業のジャンルにおいても、「おもてなし」や「一期一会」という自分だけの個性的な営み、一度限りの芸術的な営みを、無形の芸術と考えることができます。労働を芸術活動へと高めるポイントは、「個性的」と「一回性」であると書かれています。その人にしか提供できないもの、その人にしか創れないものという意味の個性的なこと、そして「その場、その瞬間、その人との出会いにおいて、一度限りうまれるもの」といった一回性が重要な意味を持つといいます。

著者はこのように整理する中で、「人生そのものが最高の芸術作品である」ということに気づいたといいます。我々の人生は、誰にとっても「一度限り」であり、与えられる様々な「制約や逆境」の中で、自分にしか歩めない「個性的な道」を切り拓き、その道の中で精一杯「自分を表現する」営みだからです。そして『最高の芸術』と言えるその背景には、「人生は一度限りであり、必ず『終わり』がやってくる」からだと言います。誰にとっても必ずやってくる「死」というものの存在、その「人生の終わり」があるから「最高の芸術」になるのです。その「死」については、別の項で取り上げていますが、ここでは割愛いたします。

ここで最後に、明主様の芸術性と照らし合わせてみます。明主様の芸術的目的には、霊性の向上、魂の向上、そして「美」があります。芸術家の使命は芸術を通して人間の獣性を抜き品性を高めることであり、芸術家の魂から発する霊能が大衆の魂の琴線に触れること、高い芸術によって魂を向上させることの大切さを幾度となくおっしゃっています。天国は真善美の世界であり、心も体も行いも美しくあることを説かれています。本書では、「技術の進歩に伴い近未来では芸術活動をするための環境が整うこと」、そして「仕事や人生そのものを芸術として受け止めることで、人生の意味や奥深さを感じ取ることができ、『人生そのものが最高の芸術作品』になるということ」が書かれています。私たちは、そこへさらに「美」を加え、魂の向上、霊性の向上、人格の向上を願い、浄霊による「生命の芸術」、自然農法による「農業の芸術」の実践を積み上げ、科学技術を上手に活用しながら、「最高の芸術作品となる人生」を目指し、さらにその喜びを多くのひとに伝えられるようにつとめてまいりたいと思います。

芸術を　楽しむ心裕かなる　人こそ天国に住めるなりけれ

天国は　美の世界なり住む人の　心も共に美しかるなり

行ひも　心も言葉も美はしき　人こそ天国天人なりけれ

この連載は〝明主様を求める〟ひとつの切り口として紹介しています。会としてみ教え解釈の固定化を図る意図はありません。寛容にお読みいただければ幸いです。（編集者）

シリーズ　幸せの種まき　(5)　イソップ物語より

金の斧と銀の斧

人は誰でも、正直で純粋な人に味方する

一人の若者が湖のある森で木を切って暮らしていました。

その日も朝から一生懸命に木を切っていたのですが、うっかり手をすべらせて、鉄の斧を湖の中に落としてしまいました。

たった一つしかない斧を湖の底に落としてしまって途方に暮れていると、突然、湖の水が激しく波立って、中からキラキラ輝く女神があらわれ、こういいました。

「これはお前の斧ですか？」

しかし、女神のもっていたのは美しく輝く金の斧だったので、

「とんでもありません。そんな立派な斧はみたこともありません」

と若者が答えると、女神はふたたび湖のなかに沈み、今度は銀の斧をもってあらわれました。しかし、

「それも違います」

と若者がいうと、三度目にようやく鉄の斧をもってあらわれたので、

「そうです。私の斧はそれです。どうもありがとうございました」

と若者はお礼をいいながら、斧を受け取りました。

若者の正直に感心した女神は、褒美として、金の斧と銀の斧を与えました。そのお蔭で若者はお金に恵まれ、幸せに暮らせるようになったのです。

その後、この話を聞きつけた隣村の若者が「自分も金持ちになってやろう」と考え、湖のなかにわざと鉄の斧を落としました。

すると、湖のなかから女神が金の斧をもってあらわれ、

「これはお前の斧ですか？」

と尋ねました。正直ものへのご褒美だったことを知らない、その男は

「はい、その通りです。拾っていただいてありがとうございます」

といって、受け取ろうとしたのです。

その瞬間、女神はものすごい形相をしてこういいました。

「お前は本当にずるくて、自分勝手で嘘つきですね。天罰がくだらないうちに、さっさとこの場を立ち去りなさい！」

こうして、この若者は金や銀の斧どころか、鉄の斧まで失ってしまい、一生、貧乏生活を余儀なくされてしまったのです。

このお話は、絵本で読みました。

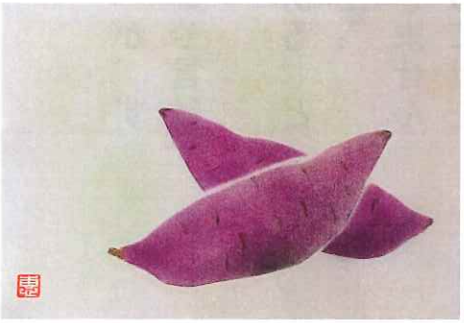
正直な人は、純粋で相手の心を和ませます。が、ずるがしこい人は、身勝手でいい加減なふるまいや言動が多いようです。

明主様はご自身で「私は若い頃から正直である。どうしてもウソがつけない」とおっしゃっています。

私たちは、信徒として〝①絶対にウソはつきません②自分の発言に責任を持って誠を捧げます〟の二点を明主様にお誓いしたいものです。

世界救世教　明主様と聖地に直結する会
（聖地直結の会）
〒413-0006
熱海市桃山町26-1　救世会館１階
電話　0557　85　8060
FAX　0557　85　8185
seichicyokketsunokai@outlook.jp

No. 66 2023年11月15日発行



収穫の喜び